

授業研究と学校経営

一 研究する組織としての学校の自律性一

1 学校をとりまく変化

- 学校の位置づけは社会の中で相対的に変わる
 - ・ 学校で学ぶことの自明性の喪失
 - ・ 学校外に膨大な情報 (相対的に学校の地盤沈下)
 - ・ 自由化の流れ (出入り自由の関係性)
 - ・ 成長モデルの崩壊 (近代の終焉)
 - ・ 生産 から 消費
 - ・ 多様化した価値観
- 喫緊の課題は社会を説得しうる教育の論理を構築こと
 - ・ 「学校だから・・・」は、通用しない
 - ・ 「学校だから・・・」は、学校の存立基盤として不可欠
 - ・ 「学校だから、ここは信託しよう」と、合理的に認められる範囲を合意する

2 学校の自律性

- ・ 学校がやること、やらないことを、学校が説明する
- ・ その論理をささえる、研究組織としての学校の自律性
- やらないことを、いかに説明するか。<ここがカギ>

3 子どもの姿に尋ねる

- ・ 子どもが、今どのような状態で、どうのびていくのかをきちんとみとる。
- ・ 評価規準は、学校の中から作る。

(時間がない、できない、ではなく、借り物で良いから、なぜそういう規準が採用されるべきかは、共通理解)

<研究する組織としての学校の自律性が備わっている場合>

評価規準の文言は、共通にしたとしても、教員同士でその理解や、具体的イメージはばらばら。

<研究する組織としての学校の自律性が備わっている場合>

この項目のこのレベルは、いついつの研究授業の、だれだれさんの姿が理想。教員間で、いついつのだれだれは、共有されている。研究成果が学校の財産。文化。